

吉阪隆正のフランス留学を契機とした住居学の展開 - フランス留学期日記帳の解読を発端として -

2021 年度中谷研究室

1X18A001-8

青木理紗子

【序論】

第1章 本研究について

- 1-1 はじめに
- 1-2 研究背景
- 1-3 研究目的
- 1-4 既往研究と本研究の位置づけ
 - 1-4-1 既往研究
 - 1-4-2 本研究の位置づけ
- 1-5 研究方法
- 1-6 研究対象
 - 1-6-1 吉阪隆正のフランス留学について
 - 1-6-2 フランス留学期日記帳について
- 1-7 本研究におけるフランス語の和訳について

【本論】

第2章 『住居学汎論』から「住居論」、そして『住居学』へ

- 2-1 はじめに
- 2-2 『住居学汎論』の概要
- 2-3 「住居論」の概要
- 2-4 『住居学』の概要
- 2-5 『住居学汎論』から『住居学』へ
 - 2-5-1 住居の類型化
 - 2-5-2 欧米の住居に関する知識の蓄積と活用
 - 2-5-3 問題解決のための考察の提示
- 2-6 『住居学汎論』から「住居論」へ
 - 2-6-1 住居学の位置づけ
 - 2-6-2 西欧の住居に関する知識の蓄積と活用
 - 2-6-3 「場の解釈」の付与
- 2-7 「住居論」から『住居学』へ
 - 2-7-1 視野の拡大
 - 2-7-2 「住居論」の役割
- 2-8 小結

第3章 フランス留学期日記帳の分析

- 3-1 はじめに
- 3-2 キーワードの選定
- 3-3 住居学について
 - 3-3-1 『住居学汎論』に対する記述
 - 3-3-2 住居学に対する記述
- 3-4 住居について
 - 3-4-1 住宅に関する記述
 - 3-4-2 住生活に関する記述
 - 3-4-3 共同体に関する記述
- 3-5 「場の解釈」について
 - 3-5-1 マルセイユのユニテダピタシオンに対する記述
 - 3-5-2 人工土地に関する記述
- 3-6 小結

第4章 住宅設計における実践

- 4-1 はじめに
- 4-2 「吉阪自邸」
 - 4-2-1 計画案の変遷
 - 4-2-2 竣工時の姿
 - 4-2-3 増築後の姿
- 4-3 小結

【結論】

第5章 考察

- 5-1 はじめに
- 5-2 住居の変容性への関心
 - ・ル・コルビュジェの「造形」への懐疑
 - ・今和次郎の「生活学」の継承
- 5-3 ル・コルビュジェの人工土地の応用
 - ・人工土地への着目
 - ・過去 - 現在 - 未来
 - ・吉阪隆正の「人工土地」
- 5-4 新たな原型への意志
 - ・メタポリズムの萌芽
 - ・新たな原型としての自邸

第6章 結論

序論

第1章 本研究について

1-1 研究動機

2020年が始まってすぐ、私たちは新型コロナウイルス感染症のパンデミックに呑み込まれた。住まいと暮らしへの関心が高まっている今、「住む」とは何かを考え直してみる機会が訪れているのではないだろうか。本研究では、吉阪隆正の考えた「住む」ということを研究することで、現在起きている変化を新たな形として考え直す足掛かりとしたい。

1-2 研究背景

吉阪隆正にとって言葉は、建築に形を与えるための重要なツールであった。吉阪の多分野にわたる精力的な活動の全貌を知り得る資料として、日記帳の存在が挙げられる。言葉と形が深く交錯する状況下で建築を探索していた吉阪にとって、日記帳は、形を言葉へ、言葉を形へ、と翻訳するための重要なメディアだったのではないだろうか。本研究では、吉阪隆正が記した日記の中でも、フランス留学期日記帳の解読を発端として、住居学に関する研究の展開を試みる。

1-3 研究目的

本研究では、吉阪隆正が住居学に対する考えを記した、フランス留学期前後に出版された3冊の著書における比較分析に加え、フランス留学期の日記帳全4冊の解読、分析を通し、フランス留学を経て、吉阪の住居学に対する考えがどのように変容したのかを明らかにすることを目的とする。また、吉阪のフランス留学後の住宅作品における計画理念や設計図面の分析を通し、フランス留学期における住居学に対する考えが住宅設計への実践に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

1-4 既往研究と本研究の位置づけ

本研究では以下の研究を既往研究として位置づける。

- 倉方俊輔(2005)『吉阪隆正とル・コルビュジェ』,王国社.
- 倉方俊輔、山名義之(2008)「吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究」,『2007 年度住宅総合研究財団研究論文集』.

・住居学の展開過程の解明

既往研究では、吉阪隆正のフランス留学期における「住居学の変容」について言及されているが、吉阪が何から影響を受けどのように考えを変化させたのか、変容の過程については十分に示されていない。故に本研究では、フランス留学を契機として住居学に対する考えがどのように変化したのかについて、具体的に根拠を示した上で論じていくこととする。

・研究資料の新規性

既往研究では、吉阪隆正のフランス留学期を窺い知る研究資料として、吉阪が妻の富久子宛に送っていた書簡と吉阪の著書が用いられており、留学期の日記帳は研究資料として扱われていない。故に本研究では、研究資料として留学期の日記帳を用いることで、吉阪隆正のフランス留学期の研究に新たな視座を加えるものとする。

1-5 研究方法

- ① 吉阪隆正の住居学に関する著書の比較分析を行う -【第2章】
- ② フランス留学期日記帳の記述分析を行う -【第3章】
- ③ フランス留学後の住宅作品の分析を行う -【第4章】
- ④ ①から③の分析を照合して考察を行う -【第5章】

本論

第2章 『住居学汎論』から「住居論」、そして『住居学』へ

2-1 はじめに

吉阪隆正は、住居学に対する考えを3冊の著書に記している。フランス留学に旅立つ直前に出版された『住居学汎論』（相模書房、1950）、フランス留学から日本に帰国した後に出版された「住居論」（彰国社、『建築学大系1 住居論』に収録、1954）、そして『住居学汎論』の改訂版として出版された『住居学』（相模書房、1965）である。本章では、この3冊を対象として比較分析を行うことで、吉阪隆正の住居学に対する考えがどのように変容したのか、について解明することを試みる。

2-5『住居学汎論』から『住居学』へ

『住居学汎論』（1950）と『住居学』（1965）の比較分析では、全23カ所で論の構成や文章に変化を確認し、これらを①「住居の類型化」、②「欧米の住居に関する知識の蓄積と活用」、③「問題解決のための考察の提示」の3つに分類した。

①「住居の類型化」では、住居の形の具体例を紹介することに加え、それらの具体例を踏まえて、住居の型として抽象的にまとめる論が付加されていた。②「欧米の住居に関する知識の蓄積と活用」では、欧米の住居に関する知識が付加されていた。③「問題解決のための考察の提示」では、現状の課題を提示することに加え、問題解決のための考察を示す論が付加されていた。

2-6『住居学汎論』から「住居論」へ

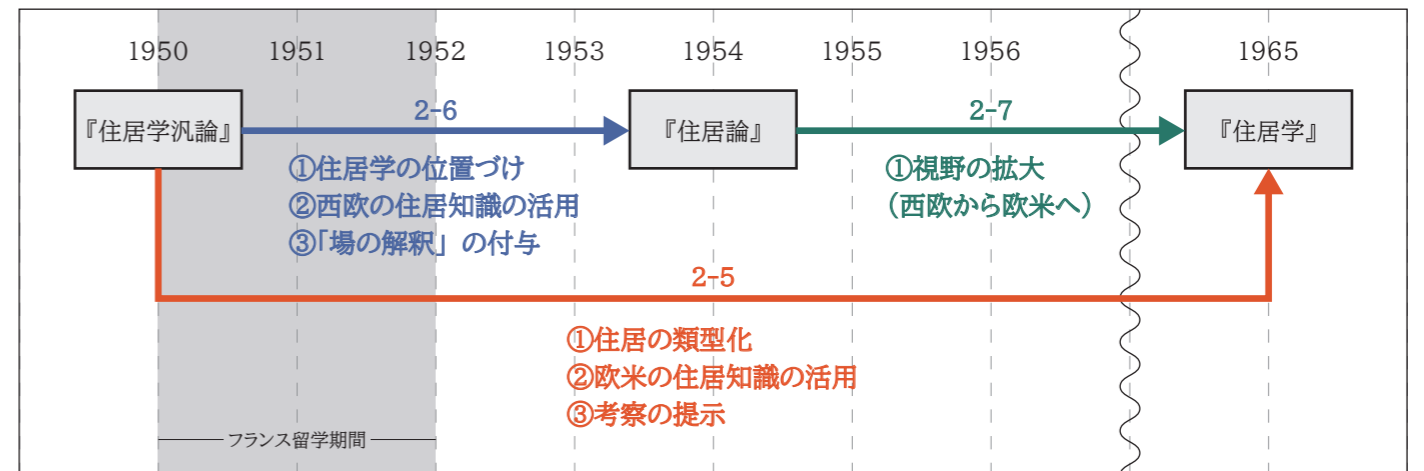
『住居学汎論』（1950）と「住居論」（1954）の比較分析では、全11カ所で論の構成や文章に変化を確認し、これらを①「住居学の位置づけ」、②「西欧の住居に関する知識の蓄積と活用」、③「場の解釈の付与」の3つに分類した。

①「住居学の位置づけ」では、生活学の中における住居学の立場を説き、住居学の学問としての位置づけに関する論が付加されていた。②「西欧の住居に関する知識の蓄積と活用」では、西欧の住居に関する知識が付加されていた。③「場の解釈の付与」では、立場の変化によって変わるものの方について論じた上で、私たちが生活を営む場にはどのような性質が見られるのかについて解釈を与える論が付加されていた。

2-7「住居論」から『住居学』へ

「住居論」（1954）と『住居学』（1965）の比較分析では、全11カ所で論の構成や文章に変化を確認した。そしてこの比較結果を、2-5と2-6における分析を踏まえて、①「視野の拡大」、②「住居論の立ち位置」の2つに分類した。

①「視野の拡大」による変化では、住居発展の歴史を検討する地域の視野が拡大していた。②「住居論の立ち位置」における分析では、2-6における「住居学の位置づけ」と「場の解釈の付与」についての論が、「住居論」のみで論じられている内容であることがわかった。



【図1】住居学に関する著書の比較分析結果

第3章 フランス留学期日記帳の分析

本章では、フランス留学期日記帳全4冊には、住居学に対する考えに関してどのようなことが記されているのか、第2章の比較分析を踏まえて選定した言葉を対象として、記述の抽出と分析を行う。

3-3 住居学について

「住居学汎論」「住居学」を対象として、住居学に対する考えが直接的に示されている記述の抽出、分析を行った。この分析から、留学初期は住居学の研究を深化するための見通しが立っていなかったことが見受けられる。しかし、図書館での文献調査や講演の聴講を経て、留学開始から半年後頃より、住居学の発展に関する重要な考えを見出していく過程を確認することができた。

住居学をどこへ持って行くかということに大きな示唆となる、平凡で、建築美の上から見るに値しないと思われているものの中に本当の生きな大きな人類の生活が営まれている、全く具体的に見られるものとして、^[1]

3-4 住居について

「住居」「住宅」「生活」「家族」「家庭」「男女」「夫婦」を対象として、住居に関する重要な記述を抽出し、分析を行った。この分析から、留学の成果として、フランスにおける住居の歴史をまとめることを目標としていたことがわかる。そして、ル・コルビュジェに対する批判的思考から、住居の形と生活の関係性について重要な考えを見出していることを発見した。

建築が造形として取り扱われていたから今までの行き詰つたのだ、もつと動きが必要なのだ、生活と造形の要素に、動いているまに担うという所に新しい道が見出されるのだろうか、^[2]

immeuble <筆者訳：不動産>、meuble に対し、semi meuble という barbarism <筆者訳：未開な生活様式>を考える、時流、家庭の変化に応じられる souplesse <筆者訳：柔軟性>をとつておくこと、^[3]

新陳代謝という生理現象が、心の上でも行われていることを考えると、私達のやっていることが不思議でならない、しかし何が pur で何が inpur かの別れ目、それが或は中世の寺院より住宅に心惹かれる私の心の問題をといてくれるかも知れない、^[4]

3-5 「場の解釈」について

「Unité d'habitation」「人工」「自然」「土地」を対象として、「場の解釈」に関する重要な記述を抽出し、分析を行った。この分析から、コルビュジェの人工土地に対する関心の高まりが見受けられた。そして、土地利用に関する重要な考えを見出したことを確認することができた。

第4章 住宅設計における実践

4-2 「吉阪自邸」

本章では、フランス留学前から計画されており、住宅作品の中でも吉阪の思想が最も色濃く反映されていると考えられる「吉阪自邸」(1955)を対象として、計画理念や設計図面の調査を行う。計画の発展過程に着目して分析を行うこととする。

4-2-1 計画案の変遷

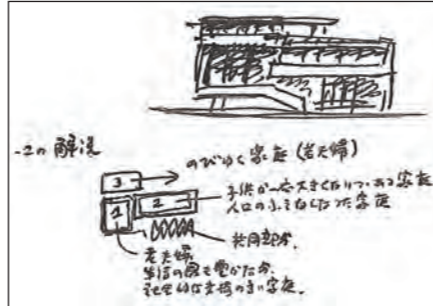
フランス留学以前の計画案では、モダニズムの特徴を取り入れたりと、一方で日本的要素を取り入れたりと、計画の軸となる表現を模索している過程が見受けられた。

フランス留学期間の計画案では、一貫してコルビュジェからの影響を確認できる。その中で、計画案の発展過程は2つの段階に分類することができると思われる。その過程を以下に示す。

- (i) 人工土地への関心
高層化を試み、ピロティと屋上庭園を計画している。
- (ii) 住居の形と生活の関係性を模索
家族や生活の変化を考慮した住居の提案を模索している。



▲【図3】(i)の一例 1951/9/15案



▶【図4】(ii)の一例 1952/9/3案

4-2-2 竣工時の姿

「吉阪自邸」は、初めに柱とスラブのみを建設し、資金に応じて壁や建具等を加えていくという計画で造られ、1955年に竣工した。コルビュジェの人工土地の考えを取り入れ、住宅不足の問題に対する解決案として提示された。また自邸における人工土地は、住宅不足を解決するためだけではなく、「好みに従い各人の要求に応じた平面」の計画を実現できることが利点であることが述べられている。



【図2】竣工時の吉阪自邸

4-2-3 増築後の姿

「吉阪自邸」は家族や生活の変化と共に姿を変えていった。ピロティが広がっていた空間には屋が増築され、上下足の区別廃止を試みている居間には、床が張られた。さらに屋上階には、プレファブの小屋が増築された。



【図5】増築後の吉阪自邸 (1970年代中頃)

参考文献・図版出典

・参考文献

- 吉阪隆正(1950)『住居学汎論』, 相模書房.
- 吉阪隆正(1954)「住居論」, 『建築学大系1 住居論』に収録, 彰国社.
- 吉阪隆正(1965)『住居学』, 相模書房.
- 吉阪隆正(1984)『吉阪隆正集 第1巻 住居の発見』, 勁草書房.
- 吉阪隆正(1986)『吉阪隆正集 第2巻 住生活の観察』, 勁草書房.
- 吉阪隆正(1986)『吉阪隆正集 第3巻 住居の意味』, 勁草書房.
- 吉阪隆正(1986)『吉阪隆正集 第4巻 住居の形態』, 勁草書房.
- 吉阪隆正(1984)『吉阪隆正集 第8巻 ル・コルビュジェと私』, 勁草書房.

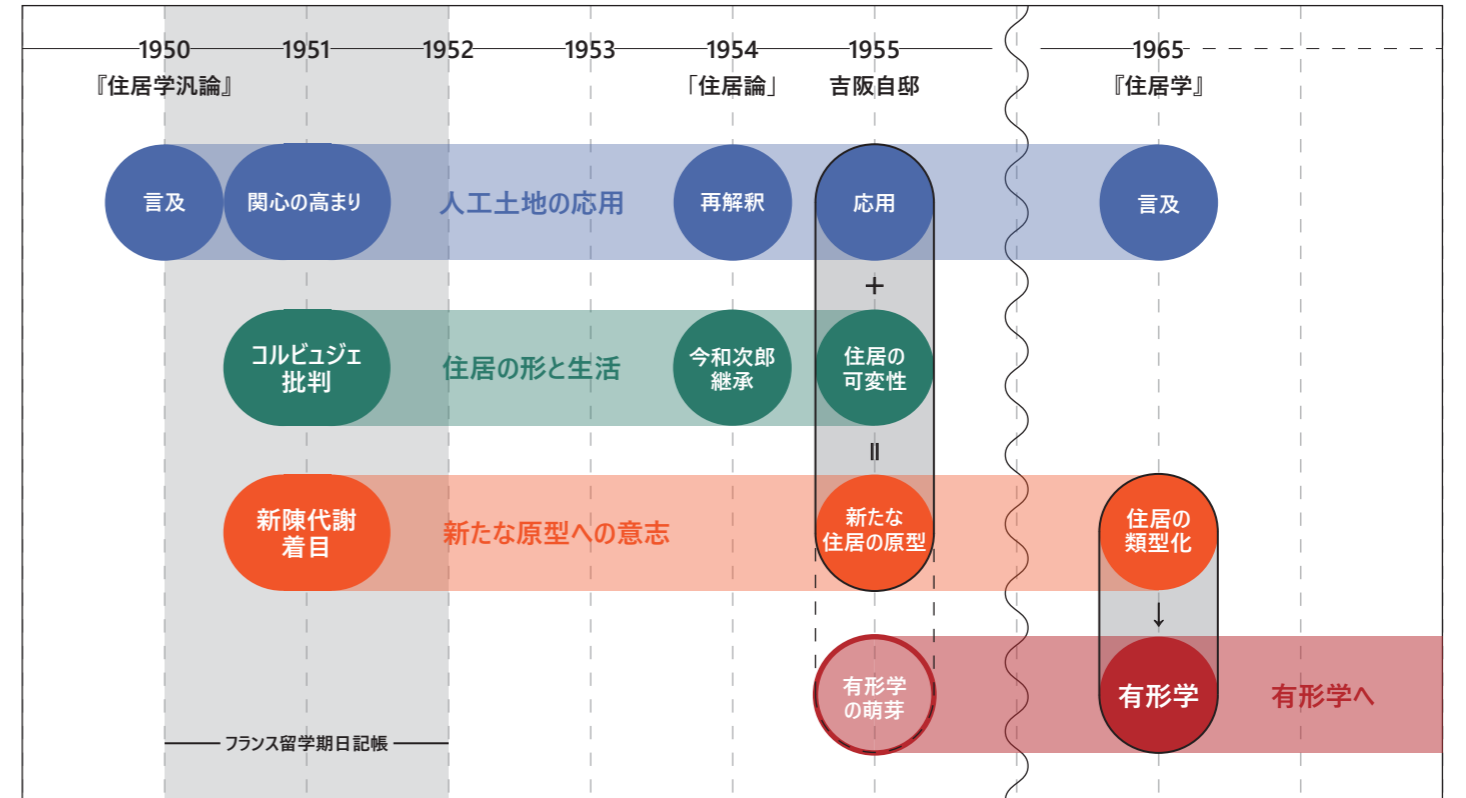
【吉阪隆正のフランス留学についての参考文献】

- 倉方俊輔(2005)『吉阪隆正とル・コルビュジェ』, 王国社.
- 佐々木宏(2010)『巨匠への憧憬 -ル・コルビュジェに魅せられた日本の建築家たち-』, 相模書房.
- 齊藤祐子(1994)『住まい学体系 /064 吉阪隆正の方法 浦邸1956』, 住まいの図書館出版局.
- 「吉阪隆正研究」, (2021年11月8日最終閲覧) http://msuzuki-ams.com/3_yoshizaka/3map.html
- 【吉阪隆正の住宅作品についての参考文献】
- 栗田勇: 編著(1971)『現代日本建築家全集15 吉阪隆正/芦原義信』, 三一書房.
- DISCONT事務局: アルキテクト編(1998)『DISCONT: 不連続統一体

結論

第5章 考察

本章では、第2,3,4章の分析結果を照合して、吉阪隆正のフランス留学を契機とした住居学の展開について考察を行う。



【図6】吉阪隆正のフランス留学を契機とした住居学の展開

5-2 住居の可変性への関心

吉阪はフランス留学期に、コルビュジェの「造形」に対する批判的思考から、生活の変化に合わせて住居の形を変化させるといふ、住居の可変性を重視した考えを生み出していたことが考察される。そして「住居論」(1954)にて、住居で営まれる生活に着目するという姿勢を一層強くし、住居学を、今和次郎が提唱した「生活学」の一分野として位置づけた。さらにこの考えを、「吉阪自邸」(1955)において実践に移した。

5-3 ル・コルビュジェの人工土地の応用

吉阪はフランス留学期に、コルビュジェの人工土地の考えに対して関心を高めていた。そして「住居論」(1954)にて、人工土地を採用した住居は半動産的性質を示すという解釈を加えている。そして、「吉阪自邸」(1955)において人工土地を応用し、5-2で述べた住居の可変性を重視した視座を加えることで、独自の理論を打ち立てていたことが考察される。

5-4 新たな原型への意志

吉阪はフランス留学期に、新陳代謝という現象に着目し、建築の分野へと応用する意志があった。そしてこの考えを発展させ、『住居学』(1965)にて住居の類型化を試みている。住居の発展過程を類型化することにより、過去に遡って住居の原型を見出し、それを現在に活かすことで、新たな原型を生み出そうとしたことが考察される。この考えを表現し、新たな住居の原型としての実験的作品が、「吉阪自邸」(1955)であったと考えられる。また『住居学』にて、住居の形と生活の関係性を見る住居学から展開し、人間と生活の形の関係性に焦点を当てた学問として、有形学を提唱している。

／吉阪隆正+U研究室, 丸善株式会社.

- 都市建築編集研究所編(2001)『素顔の大建築家たち01』, 建築資料研究社.
- 2004吉阪隆正展実行委員会編(2005)『吉阪隆正の迷宮』, TOTO出版.
- 編著: 齊藤祐子, 写真: 北田英治(2020)『吉阪隆正+U研究室 | 実験住居』, 建築資料研究社.
- 『住宅建築 2021年4月号』, 建築資料研究社.
- 『住宅建築 2021年6月号』, 建築資料研究社.
- 【その他の参考文献】
- 今和次郎(1971)『今和次郎集第5巻 生活学』, ドメス出版.
- 著: アンディ・アラシェフスカ, 訳: 川浦康至・田中敦(2011)『日記とはなにか一質的研究への応用』, 誠信書房.

・引用、図版出典

- [1] フランス留学期日記帳, 4R p31, 1951/3/7(水)
- [2] 同上, 1R p28, 1950/9/12(火) [3] 同上, 4R p70, 1951/4/21(土)
- [4] 同上, 4R p59, 1951/4/3(火)

- 【図1】筆者作成
- 【図2】吉阪隆正(1986)『吉阪隆正集 第4巻 住居の形態』, 勁草書房, p59より抜粋
- 【図3】国立近現代建築資料館所蔵資料, 筆者編集
- 【図4】吉阪隆正(1986)『吉阪隆正集 第4巻 住居の形態』, 勁草書房, p30より抜粋
- 【図5】国立近現代建築資料館所蔵資料
- 【図6】筆者作成